

母子里地区の将来に向けて（まとめのイメージ）

1 母子里地区の概要

- 母子里地区は、三方山林に囲まれ、北は美深町、東は名寄に隣接し南に道立自然公園朱鞠内湖を抱える高位盆地を形成しています。地区内には国道275号線と道道688号線が交差し、幌加内町の北の玄関口として、最北端に位置しています。
- 母子里地区への入植は、北大演習林（雨龍研究林）の入植者募集を契機に700町歩139戸分の区画を設定し、昭和4年に入植者へ土地を貸し付け、入植が始まりました。
- 昭和25年から30年ころには、総人口約600人、世帯数約90戸の集落を形成していましたが、高度成長期を迎えると、次第に都市部に人口が流出し、平成5年に小中学校が閉校となり、平成7年にはJR深名線が廃止されました。
- 気象条件が厳しく、昭和18年2月に最大積雪量2.78m、昭和53年2月には、マイナス41.2度という日本最寒を記録しました。

(1) 人口

母子里地区は、昭和25年に人口618人、87世帯を数えましたが、それ以降は転出による過疎化や少子高齢化などで人口が減少し、平成26年1月には34人、19世帯となっています。

年次	人口	世帯数
昭和25年	618	87
平成7年	67	30
平成26年1月	34	19

出典：母子里の歴史（開基80周年記念誌）

世代別の人口の特徴としては、15歳未満の年少人口が6.2%、15歳から64歳までの生産年齢人口が34.4%、高齢者人口が59.4%となっており、北海道と比較して、年少人口を占める割合では5.8ポイント低く、また、高齢者人口が占める割合では34.7ポイント高く、少子高齢化の進行が顕著となっています。

世代	母子里地区		北海道
	人口	割合	
年少人口（0～14歳）	2	6.2%	12.0%
生産年齢人口（15～64歳）	11	34.4%	63.3%
高齢者人口（65歳以上）	19	59.4%	24.7%
不明	2	—	—
合計	34	100.0%	100.0%

出典：母子里集落の維持・再生に関する生活実態調査報告書（旭川大学）
平成22年国勢調査

(2) 家族構成

母子里地区の家族構成では、夫婦やその未婚の子で構成する「核家族」世帯が9世帯となっており、集落全体の約半数を占めているほか、夫婦とその親で構成する「拡大家族」世帯が1世帯、「単身」世帯が8世帯となっています。特に、75歳以上の高齢者のみの「単身」世帯が5世帯と多く、今後、生活面でのサポートが必要になってくると考えられます。

区 分	核家族	拡大家族	単身	不明	計
世 帯 数	9	1	8	1	19
割 合	50.0%	5.6%	44.4%	—	100.0%

出典：母子里集落の維持・再生に関する生活実態調査報告書（旭川大学）

(3) 他出子、親戚、友人、近所などとの関係

旭川大学による聞き取り調査では、母子里地区にお住まいの世帯と他出子（離れて暮らしている家族など）との関係を見ると、地理的条件の制約などから疎遠となっている世帯が多くなっています。一方、母子里地区内に親戚関係を持っている世帯が5割と多いほか、約8割の世帯が親密な近所づきあいをしているなど、身近な方々との関わりが深く、母子里地区内において相互扶助の関係が形成・維持されています。

(4) 農業

① 酪農

母子里地区では、昭和40年頃に実施した国営開拓パイロット事業により酪農が盛んで、平成5年には、農家戸数15戸、出荷乳量5,782トンの規模でしたが、飼料の高騰や乳価の低迷などにより、現在、酪農は営まれていません。

年 次	農家戸数（戸）	出荷乳量（トン）
昭和56年	23	4,248
平成5年	15	5,782
平成20年	5	3,638

出典：母子里の歴史（開基80周年記念誌）

② 養鶏業、そば農家、家庭菜園

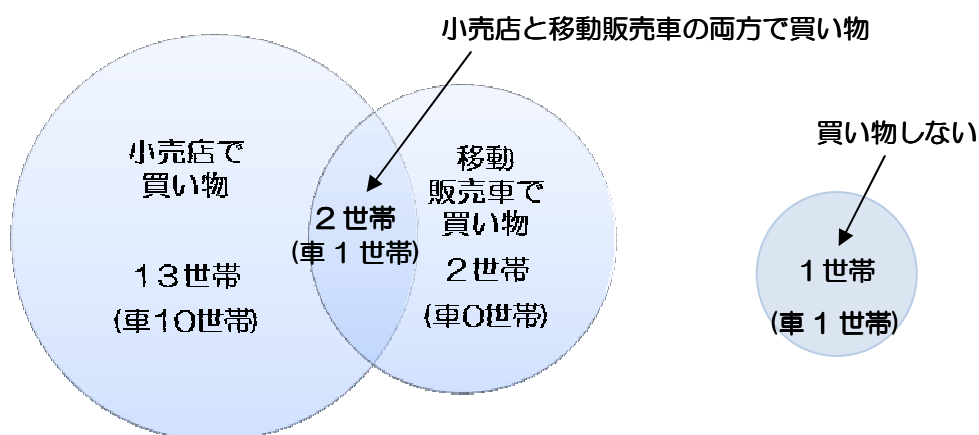
現在、母子里地区で事業として農業を営む世帯は、養鶏業とそば農家（兼業）がそれぞれ1世帯づつとなっていますが、母子里地区全体の約7割の世帯で家庭菜園を持っており、20品目以上の作物を栽培しているなど、こうした家庭菜園における作物が、母子里地区の方々の日々の生活を支える上で、重要な役割を果たしています。

(5) 北大演習林

北大演習林（雨龍研究林）の入植者募集を契機として、昭和4年に母子里地区への入植が開始されて以降、昭和20年台後半の最盛期には、こうした入植者や演習林職員、国鉄職員、教員、駅前市街地の商店など、演習林に関係する方々を中心に母子里地区が形成されました。母子里地区の方々が北大演習林を支える重要な役割を担う一方で、北大演習林も母子里地区の経済を今日まで支えてきました。

(6) 買い物の状況

現在、母子里地区には、商店が無いことから、名寄市など小売店へ買い物に出かける方が多く、そのうち自家用車を利用している方が約6割を占めています。また、移動販売車で買物をする方が約2割おり、一人暮らしの高齢者の方などは、移動販売車だけで買物をしている方もいます。



出典：母子里集落の維持・再生に関する生活実態調査報告書（旭川大学）

(7) 公共施設・交通機関・生活関連施設等の状況

①公共施設

- コミュニティセンター
- 母子里クリスタルパーク
- 大学施設（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション 雨龍研究林、北海道大学低温科学研究所、名古屋大学太陽地球環境研究所母子里観測所）

②交通機関

- バス：幌加内～名寄間 1日4往復 ※JR深名線（平成7年廃止）代替バス

③生活関連施設

- 簡易郵便局（金融機能あり）

④医療

- 幌加内町国民健康保険病院の巡回診療（週1回） ※常設の医療機関無し

2 母子里地区の課題（旭川大学による生活実態調査などより）

(1) 地域コミュニティの維持

- 近所づきあいが良好で、住民同士の関係が深いですが、若い世代が少ないため、地区役員などの引き継ぎが困難となっています。
- 母子里地区に住んでいて良かったと感じている方が、全体の約7割を占めており、母子里地区への思いや、愛着の深さが感じられますが、一方では、生活必需品の購入が困難といった問題や地元で働く場所が不足している状況など、現在の暮らしの中での不満や不安を取り除く方策を検討していくことが求められています。
- ボランティア活動を含め、働きたいと考えている方が約3割いることから、こうした方々の協力を得ながら、お互いにできる事を気軽に協力しあえる仕組みづくりなどを検討していくことが求められます。

(2) 高齢者の支援

- 母子里地区に商店がなく、また、自家用車などの移動手段を持たない高齢者の方が多く、将来、さらに増えることが予想されますので、こうした方への買い物や通院などの支援を検討していくことが求められます。
- 75歳以上の後期高齢者の単身世帯が5世帯、全体の約4割となっていることから、日常生活で困っていることなどのニーズを把握しながら、しっかりとサポートしていくことが求められます。

(3) 大学との連携

- 母子里地区のなりたちから深い関わりのある「北大演習林（雨龍研究林）」や平成25年に生活実態調査を行った「旭川大学」と、母子里地区の将来に向けて、連携して取り組んでいくことが求められます。

(4) 産業・ビジネス

- 山菜など、母子里地区にある資源を有効に活用した雇用の場の創出について検討していくことが求められます。
- 母子里地区の約7割の世帯にある家庭菜園の作物を有効に活用した取組について検討していくことが求められます。

3 将来に向けて母子里地区の「めざす姿」

4 母子里地区の将来に向けた今後の取組の方向性（イメージ）

<地域コミュニティの維持>

- 地域おこし協力隊の検討
- 母子里地区の住民同士が気軽に助け合える仕組みづくりや支え合いの意識の醸成

<高齢者の支援>

- 高齢者の方を中心とした買い物支援の取組についての検討
- 高齢者の方への生活サポートなどに取り組んでいる「よるべさ」との連携

<大学との連携>

- 「北大雨龍研究林」と「旭川大学」との連携

<産業・ビジネス>

- 山菜など地域資源を活用したビジネス化の取組についての検討
- 家庭菜園の作物を活用した取組についての検討

5 母子里地区の将来に向けた具体的な取組